

# 大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

計画名 Plan	オランダにおけるリハビリ実践の人類学的考察に向けた予備調査
氏名 Name	林寛人
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻 修士課程2年
渡航国 Country	オランダ
渡航日程 Travel schedule	2025年2月18日 ~ 2025年3月21日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

今度の渡航は、博士課程の研究テーマである「オランダのリハビリテーション医療に関する人類学的考察」の実施に先立ち、本格的な長期調査への移行に必要な情報を収集するためのフィールド予備調査を行うことを目的として実施された。

本研究は、オランダのリハビリテーション実践に関するフィールドワークを通して、療法士と患者の間でどのような関係性が築かれているのかに注目する。その上で、患者の身体に起きたドラスティックな身体変容の経験以降、患者自身がどのような生を営んでいくのか、身体の変化を被った新たな自分とどのように向き合っているのかということ明らかにし、患者にとっての「自己」が立ち現れる過程とその様について検討する。ただし、患者がリハビリテーション医療へ取り込まれていくとき、また、療法士が患者と実際に向き合うときには、医療行政や制度、保険といった社会構造の側面も多分に影響していることが考えられる。そのため今度の現地調査では、2025年度以降に実施予定である長期の現地調査に向けた予備調査として、オランダにおけるリハビリテーション医療を取り巻く現状を把握するための資料収集を実施した。

また特に、医師に依らない自律型組織としてオランダ全土にその広がりを見せるだけでなく、世界的に先進的な組織として注目されている訪問リハビリ・介護組織「Buurtzorg」（以下ビュートゾルフ）の実践に注目し、組織の地理的布置を明確にするためにアムステルダム及びデン・ハーグにおいて、施設のマッピングと周辺地域の状況についての記録をとった。加えて、当該地域で暮らす人びとへの当該組織に関する聞き取りを行い、ビュートゾルフの役割や試みが生活者へどれだけ敷衍し影響力を持っているのか、という点についての調査も行った。

### 成果 Outcome

資料収集は、特にアムステルダムのoba bibliotheek（アムステルダム公共図書館）及びデン・ハーグのkoninklijk bibliotheek（王立図書館）において行った。アムステルダム公共図書館は国籍に限らず利用可能な図書館だったが、王立図書館は入館に利用証を作成する必要があった。パスポートが身分証明書として使え、年間15ユーロの利用料を払う有料会員になることで図書を借りることができるが、今回は1ヶ月の滞在だったため施設利用のみ可能な無料会員として利用証を作成した。なお、今回作った証明書の有効期限は1年間であるため、その期限が切れた場合には再度更新手続きが必要となる。

資料収集を進める上で明らかになったのは、オランダにおいては、家庭医（オランダ語でhuisarts）の制

度が深く浸透しているということである。日本のかかりつけ医とはその性質を全く異にしており、オランダでは家庭医をまず見つけた上でないと、人びとは各種医療・福祉機関へのアクセスすらできないという。そのため人びとは、何かしらの身体的不調や悩みがある場合にはまず家庭医へ相談し、その上で適切な治療を受けるための手ほどきを家庭医より受けることとなる。病院は専門性が極めて高い施設となっており、家庭医は日本でいうところの総合診療医を担っていると言っていることができるだろう。一方で、家庭医1人あたりが担う患者数が年々増加傾向にあることも明らかとなった。ここには、医者働き方が変わってきたことも影響しているようだが、今回の資料収集では原因の輪郭を形にするまでには至らなかった。

また、医療・介護保険制度についても触れる必要がある。オランダには大きく3種類の保険があり、それが特別医療費保険（以下AWBZ）、健康保険（以下ZVW）、私的医療保険である。AWBZは個人単位での加入隣、オランダに居住及び雇用される者で給与税を納めている者全員が強制加入するものである一方で、ZVWは私的主体としてのCare Insurerが役割を担う営利企業であるため、その性格を異にする。また、前者が長期医療をカバーするものだが、後者は短期医療をカバーするためのものであり、対象となる医療サービスによって適用される保険が異なる点に注意しなければならない。そして私的医療保険によって、ZVWでカバーできない、より軽度な医療・介護サービスを対象とした部分を補うことになっている。保険制度のこうした概要の部分の把握はできた一方で、今回及び今後対象となるビュートゾルフの利用と関わる医療・介護保険制度はどれなのか、関わらない部分があるとすればそこはどの部分なのか、といったより詳細な情報に関しては今回収集することができなかった。

資料収集と並行して行ったビュートゾルフの地理的布置把握のためのマッピング及び周辺地域の状況調査においては、ビュートゾルフのホームページに掲載されている地域毎の住所と地図、そしてGoogleマップを活用しながら行った。そのため、全く情報がないままにひたすら歩いて地図の「地」の部分を作成するというよりも、ある程度の場所のあたりをつけた上で当該施設及びその地域的環境を「図」として把握するという意味合いが強いものとなった。Googleマップを同時に用いたのには、ビュートゾルフのホームページに掲載されている地図とのずれが見られる場合が少なくなく、今回は地域こそアムステルダムとデン・ハーグに限定されたが、より正確な布置の把握を行うためであった。

マッピングをする中でおおよそ明らかになったのは、ビュートゾルフの大半が住宅街の中にひっそりと佇んでいるということだった。当初想定していたのは、日本の個人経営のクリニックのように建物1つを活用する他、マンション等の集合住宅の1階にそれと分かるように居を構えるのと同様の形で、その存在感をありありと示すような医療・福祉施設としてのものだった。しかし実際に地図が示す場所へ赴くと、マンションやアパートの1階の一角にあるという点では日本のクリニックと似たものを感じたが、そこがビュートゾルフであるとすぐに分かるようなかたちで看板や名前が示されている訳ではなく、建物へかなり近づいてようやくそれと分かるような、こぢんまりとした施設がほとんどであった。地図が指し示す場所近辺をうろろりしながら、既に通っていたのにも拘わらず1回では見つけることのできなかつた場所もあった。

また、今回足を運んでその様子を実際に確認することのできたビュートゾルフ全てにおいて見られた訳ではなかったが、家庭医の紹介無しにはビュートゾルフを利用することはできない、という旨の文言が入口に書かれていることもあった。この点からも、資料収集の中で明らかになった家庭医の存在感や医療・福祉機能における役割の重要性を感じずにはいられない。そうした文言を明文化して表示していない場所もあったが、家庭医を介した上での利用は恐らく前提となっていることが予想される。そのため、渡航前に想定していた自律的な組織かつ医師に頼らずに看護・介護職の従事者が利用者のケアにあたっている、というビュートゾルフに対する捉え方の前提を見直す必要がある。ただし、ビュートゾルフの各施設がその場所に置かれている意図や地域毎の施設数の差異といった、ビュートゾルフ本体の経営そのものに関する情報については今後の課題である。

ビュートゾルフに関する個人的な話としては、デン・ハーグの教会にて話をする機会を頂いた2人の女性との会話が示唆的であった。2人は既に退職されており、詳細な年齢こそ聞くことができなかったが70～80代くらいの女性であった。1人の女性はその方の妹が半身不随のためにビュートゾルフを利用しており、ビュートゾルフの存在を知っていたが、もう1人の女性は私との話で初めてその存在を知ったということだった。妹が利用している女性の話によれば、ビュートゾルフが行うのは、利用者の家への訪問にはじまり、利用者それぞれが生活を送る上で不自由に感じている部分の手伝いだという。そのため、ビュートゾルフの職員が利用者のためにご飯を作って提供したり、家の中の掃除を代わりにしたりということではなく、あくまで利用者の生活への補助が主だという。また、利用料について尋ねたが、正確な数字こそ分からないがかなり安いということであった。個々人の収入や金銭感覚によって料金の価格設定に対する認識のずれは多少あるということは置いておいて、かなりという強調が入っていたところから他の医療・福祉サービスと比べた時に、ある程度のお手頃感があると想定して良いだろう。また、ビュートゾルフは各利用者の家に滞在する時間がとても短く、大体が20～30分であるため、そこまで込み入った作業・ケアを行うことの難しさも、介入の程度がそこまで大きくないことの理由の1つとして挙げられるだろう。

一方でビュートゾルフの名を初めて聞いたというもう1人の女性については、やはり家庭医の存在を挙げた。曰く、家庭医に自身の身体のことを委ねている部分は大きく、家庭医の話を良く聞くことで日々の生活を不自由なく過ごすように努めているということだった。再三登場する家庭医の存在感だが、実際にオランダで生活をする方から家庭医の担う役割の重要性を聞き、資料収集やマッピングで得た情報がより具体的に考えることが可能となった。今回の渡航でお話しを聞いたのはこの2人だけであったため、より多くの方にビュートゾルフ及び家庭医に関する話を聞く必要があるが、同年代の人びとの中でビュートゾルフに対する認識の具合に差があることが判明したのは大きな収穫だったといえる。

## **今後の展望** Prospects for the future

今回の渡航では、これまで日本に持ち込まれてきたビュートゾルフに対する認識を改める必要があることを認識できたという点がまず大きな収穫であったと考えられる。それは、オランダに深く根づく家庭医という医療・福祉制度及び存在感の大きさが、ビュートゾルフという看護・介護を主に行う施設にも大きく影響していることが見過ごされてきたことを認識できたという意味においてである。医療・福祉を論じようとする時に、その施設や従事者たちのとりくみを見るというアプローチが重要であることには同意した上で、そこからより広い社会的文脈や制度との絡まり合いや相互影響へと目を向けることで、単なる医療・福祉の従事者とそれを利用する人びととの関係性や経験の微視的な観察に留まらない、「社会」概念の理論的構築への寄与へと繋がると考えられる。

こうした理論的構築への貢献及びそのためのフィールド調査を実施するためにも、オランダ語の熟達が必要である。デン・ハーグの教会で快く話をしてくれた2人の女性は英語を話すことができたため、拙いながらも会話を続けることができたが、その女性たち曰く、やはり年代が上がるにつれてオランダ語のみを話す方の割合が増えるという。そして本研究が対象とする人びとは、その多くが高齢者であることが予想されることに加え、ビュートゾルフで従事する職員と利用者との会話がオランダ語で交わされることを鑑みると、より詳細なケアの動態を捉えるためにはオランダ語の修練が必要となる。

また、フィールド調査で得た情報をアカデミックな議論へと発展させるために、専門とする文化人類学における理論の動向や趨勢を勉強すると合わせて、オランダの政治経済的な状況に関する理解を深める必要がある。今回の資料収集では特に医療・福祉制度に関わる部分にフォーカスしたため、それを取り巻く広範な政治経済状況に関する資料・文書にはあまり目を通すことができなかった。これらを行うことで、対象とするビュートゾルフの実践及びその制度的背景の理解に繋がり、ビュートゾルフのとりくみを複眼的に捉え

ることが可能となるだろう。

課題は多いが、その課題の多くが、今度の渡航及び調査によって、それまで見えていなかった点を可視化したことで浮かび上がってきたものである。博士課程での長期調査を行う上で、今度の渡航経験を無駄にしないよう日々考えを発展させていきたい。



デン・ハーグにあるビュートゾルフ。Fysiotherpie（理学療法）と併設されるかたちである。入口左手にある案内板の一番下にある、青地に白い文字で書かれたものが、ビュートゾルフがあることを示している。

2025/03/03 筆者撮影



アムステルダムにあるビュートゾルフ。高速道路に周囲を囲まれたコンテナ群の一角にある。今回訪れた他のビュートゾルフと比べて、住宅街との距離が離れている。一見すると医療・福祉関連の施設には見えないが、青地に白い文字で「BUURTZORG」と示されている。

2025/03/02 筆者撮影